

教 育 長 様

校番 022 吉田 高等学校長

**「高等学校課題発見・解決学習推進プロジェクト」に係る研究開発校  
令和2年度 報告書****1 研究の概要****研究の目標**

吉田高校全体で育成すべき資質・能力をもとに、1年生科目「産業社会と人間」及び2年生総合的な探究の時間「課題探究」など探究的な学びの時間における年間指導計画を完成させる。特に今年度は、これまで学年ごとに研究してきたパフォーマンス課題・ルーブリック評価に係るそれぞれの成果を体系的に整理し、3年間を通した全学年の計画を完成させ、それをもとにした評価活動を実践していくことで、教師側、生徒双方の資質・能力の向上を目指す。

**総合的な探究の時間等の取組内容****① 生徒の状況把握及び分析**

研究開発校全体で実施した「生徒の変容分析」を活用して分析している。年間で2回（昨年度は臨時休業の影響で1回の実施）、1年生科目「産業社会と人間」及び2年生総合的な探究の時間「課題探究」のパフォーマンス評価を実施し、それぞれの資質・能力ごとに集計を行った。

**② 育成する資質・能力の設定（共有）**

全職員による職員研修において、育成する資質・能力の議論を重ねることで共有している。特に10月13日に実施された校内研修会では、3年間の取組を経て、初年度に各教科が設定した「探究力」の定義について議論した。試行錯誤する中で、生徒の実態に即した資質・能力の発見があり、さらに質の高いルーブリックの再構築ができた。

**③ 資質・能力の育成に向けた各種計画の作成**

学校経営計画に示されていた「育成すべき5つのスキル（課題発見力、情報収集力、整理・分析力、批判的思考力、情報発信力）、5つのマインド（好奇心、持続性、楽観性、柔軟性、冒険心）」という資質・能力の概念と、実際のルーブリックで評価すべき資質・能力（理解力・分析力・判断力・表現力・探究力）には開きがあり、抜本的な学校経営計画の見直しを図った。それに伴って、各教科の年間指導計画及び単元計画や、LHR、特別活動などの全体計画も見直され、大きく組織的な構造改革が展開された。

**④ ③に基づく教育活動の実施状況**

「誠実・忍耐・協和」という本校の校訓に立ち返り、そこから主体的に学ぶ姿勢（誠実）、困難なことにも果敢に挑戦する姿勢（忍耐）、そして多様な価値観を認め、他者と協働する姿勢（協和）という「育成すべき力」の骨格を教育目標に掲げた。1年生科目「産業社会と人間」や2年生総合的な探究の時間「課題探究」等の探究的な学びの時間において、これら再構築された新たな資質・能力の育成を意識しながら、協働的かつ実践的な授業展開を行った。

**⑤ 評価活動（ルーブリック等の活用等）**

昨年度のルーブリック集計の分析では、与えられた課題について真摯に取り組み、考えた結論を自分の言葉で他者に伝えようとする表現力などはしっかりと身に付いてきている一方で、情報を多面的に分析し、それらを根拠として論理を展開する判断力が不十分であることが明らかになっていた。今年度は、図書を大規模に購入して資料の充実を図っただけでなく、県立図書館と連携し、書籍を活用した研究活動の展開に大きく力を入れたことで、生徒の表現の中に根拠となる情報を記載するなど、論拠を明確にした論理展開が見られるようになった。

**⑥ 次年度計画への反映**

新たに学校経営計画を年度末に見直したばかりであり、パフォーマンス評価を行う際のルーブリックにはまだ十

分に反映されていないため、まずはマスタールーブリックの見直しが次年度初めの大きな課題となる。

## 成果

育成すべき資質・能力をルーブリックでパフォーマンス評価し、それをポートフォリオとして生徒自身の探究活動履歴書とすることや、その成果物を目に見える形で蓄積して、教職員側の研修材料を確保するといった、本校における課題発見・解決学習の骨格は、この3年間である程度完成した。また、本年度にはルーブリックと「身に付けたいマインド・スキル」といった本校の教育ビジョンとのずれを修正すべく、学校経営計画を大きく改訂することができ、プロジェクトの枠を超えて全体で議論ができたと言える。

生徒の変容という観点では、対話的な学びの部分で大きく成長が見られるようになり、特に発問の際には発言が正しいかどうかにかかわらず自分の意見を積極的に述べる場面が様々な授業の中で見られるようになった。またルーブリックの評価指標の中でも特に「探究力」に関しては、生徒の変容が見られる。例えば保健体育科であれば「継続する力」、家庭科であれば「生活向上力」など、各教科の特性が強く感じられ、生徒へのメッセージとして受け止められるようになってきている。個別に生徒の作成した文章をみても、自らの意見を俯瞰して客観的に自己評価し、クリティカルに捉えながらさらに思考を深めていることが見て取れる。

また、「みつや学」におけるパフォーマンス評価については、「KJ法」による授業者全員の議論により客観的な評価に取り組んだ。これにより、評価について担当で議論を深めることができただけでなく、資質・能力をより具体的かつ明確にすることができた。例えば「理解力」であれば、出題者の意図を読み取れているかどうかを重視したり、「判断力」であれば明確な根拠を持って解決のための構想を立てているかを見取るなど、そのパフォーマンス課題に合わせて議論の上捉え方の定義を確認することで、よりエビデンスのある評価に近づける工夫をした。

## 課題

上記のように、ある程度目標・指導・評価のPDCAサイクルが定着しつつある一方で、その必要性・重要性を全教職員で共有できておらず、さらに本年度はコロナ禍ということもあって実践的・体験的な活動の機会が限定されており、パフォーマンス評価の回数も減少してしまった。現状では学校の教育活動の軸になっているとは言い難く、今後はこれらの活動をどのようにして教師一人一人が「自分事」と捉えるのが課題である。

特に、授業者側のファシリテーターとしての資質・能力という重要な点については、依然として大きな課題が残っている。パフォーマンス課題や科目「産業社会と人間」における取組で経験を重ね、展開の工夫や生徒の発問に対する返し方などを議論してきたが、発展途上である感は否めない。探究的な活動は全PDCAサイクルを何度も重ねながら深めていくスパイラル状の取組でなくてはならず、取組初期の段階では稚拙な意見や表現を容認しながら展開していくべきであるが、教師側がより確実な正解を求めたり、場合によっては正解を提示してしまう場面が多い。生徒達自身が、自分の思いをうまく言葉にできないとき、いかにしてその思いを汲み取り、サポートして円滑な討議を促進していくのが大きな課題である。

また、ルーブリックによる評価の分析結果から得られた課題としては、考えた結論を自分の言葉で他者に伝えようとする表現力などは着実に身に付いてきている一方で、情報を多面的に分析し、それらを根拠として論理を展開する判断力が不十分であることが明らかになっている。実践的・体験的な探究活動と、日々の学習活動をどのように関連付け、整理するかも今後の大きな課題である。

## 次年度の目標（育成する資質・能力）及び取組内容

本校における探究学習の時間は、1年次科目「産業社会と人間」、2・3年次総合的な探究の時間「課題探究」を総称して「みつや学」として、コンソーシアムを活用した地域協働のカリキュラム及び評価材を創り上げてきた。しかし、試行錯誤を繰り返しながら取組を進めてきたことから、次年度にはこれらを本校のカリキュラムとして整理していきたいと考えている。特に、改訂された新しい学校経営計画を基に、生徒に身に付けるべき資質・能力も再整理し、ルーブリックを実用的なものに仕上げていく。

また、「教師のファシリテート能力向上」という目標のため、次年度は「みつや学」を積極的に校内公開し、相互の授業観察及び研修ができる工夫を行う。特に、拙速な正答や模範回答の提示を避け、稚拙な意見や表現を容認しながら授業を展開できるようにする。

さらには、これまで以上に生徒が自分事として地域の課題に向き合うことができるように、これまでに連携してきたそれぞれの地域機関との関係性を整理・統合させる。具体的には、本校を「器」としたスクールコミュニティを創り上げ、安芸高田市にある様々な機関が、地域の課題解決に向けて自分たちにできることは何かを問い続けられるような、「地域協働コンソーシアム」を形成する。